

日蓮大聖人御書全集

せいちょうじだいしゅちゅう

清澄寺大衆中

新版

1206

5

1209

せいちょうじだいしゅちゅう

清澄寺大衆中

けんじ ねん
建治 2年 ('76)

がつ にち
1月 11日

さい
55歳

せいちょうじちゅう
清澄寺知友

しんしゅん けいが
新春の慶賀、自他幸甚、幸甚。

こぞきた

さだ

しきい あ

去年來らず、いかん。定めて子細有らんか。そもそも、參詣
くわだ そうち
を企て候わば、伊勢公御房に十住心論・秘藏宝鑰・二
きょうろんとう いせこうのごぼう
教論等の真言の疏を借用候え。かくのごときは、真言師
ほうき ゆえ
蜂起の故にこれを申す。また、止觀の第一・第二、御隨身候
とうしゅん ふしょうき
え。東春・輔正記などや候らん。円智房の御弟子に
かんちぼう も

觀智房の持つて候なる宗要集、かしたび候え。それの
かんちぼう そうち
しゅうようしゅう
貸 紿 そうち
えんちぼう みでし

みならず、ふみの候由も人々申し候いしなり。早々に返すべきのよし申させ給え。

今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か。淨顕御房、義城房等には申し給うべし。

日蓮が度々殺害せられんとし、ならびに二度まで流罪せられ、頸を刎ねられんとせしことは、別に世間の失に候わ

ず。

生身の虚空藏菩薩より大智慧を給わりしことありき。

「日本第一の智者となし給え」と申せしことを不便とや思

みょうじょう

だいほうしゅ

たま

みぎ

そで

しめしけん、明星のごとくなる大宝珠を給わつて右の袖にうけとり候いし故に、一切経を見候いしかば、八宗ならびに一切経の勝劣、ほぼこれを知りぬ。

その上、真言宗は法華経を失う宗なり。これは大事なり。まず序分に禪宗と念佛宗の僻見を責めてみんと思う。

その故は、月氏・漢土の仏法の邪正はしばらくこれを置く、

日本國の法華経の正義を失つて、一人もなく人の惡道に堕つることは、真言宗が影の身に随うがごとく、山々寺々ご

とに法華宗に真言宗をあいそいて、如法の法華経に

じゅうはちどう
十八道をそえ、餓法に阿弥陀経を加え、天台宗の学者の
かんじょう
灌頂をして真言宗を正とし法華経を傍とせしほどに、
しんごんきょう
しんごんしゅう
もう
にぜんごんきょう
うち
けごん
はんにや
おと
しょう
ほけきょう
ぼう
しんごん
あみだきょう
くわ
てんだいしゅう
がくしゃ
慈覚・弘法これに迷惑して、あるいは「法華経に同じ」、あ
じかく
こうぼう
めいわく
すぐ
もう
ほとけ
かいげん
おな
るいは「勝れたり」など申して、仏を開眼するにも仏眼・
だいにち
いん
しんごん
かいげんくよう
もう
かいげん
おな
大日の印・真言をもつて開眼供養するゆえに、日本国の大画
しょぞう
みな
むこん
むげん
もの
にほんこく
もくえ
ぶつげん
か
の諸像、皆、無魂・無眼の者となりぬ。結句は天魔入り替わ
だんな
ぶつぞう
おうぼう
つ
つて、檀那をほろぼす仏像となりぬ。王法の尽きんとする、
これなり。

あくしんごん

鎌

倉

きた

にほんこく

この悪真言、かまくらに来つて、また日本国をほろぼさ

うえ

ぜんしゅう

じょうどしゅう

もう

言

んとす。その上、禅宗・淨土宗などと申すは、またいう

びやつけん

もの

ばかりなき僻見の者なり。

もう

かなら

にちれん

いのち

な

ぞんち

これを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかど

こくうぞうぼさつ

ごおん

報

けんちようごねんしがつ

も、虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために、建長五年四月

にじゅうはちにち

あわのくにとうじょうのじょう

せいちようじ

どうぜん

ぼう

じぶつどう

二十八日、安房国東条郷の清澄寺、道善の房、持仏堂の

なんめん

じょうえんぼう

もう

もの

しようしよう

だいしゅ

南面にして、淨円房と申す者ならびに少々の大衆にこれ

もう

のちにじゅうよねん

あいだ

たいてん

もう

を申しあじめて、その後二十余年が間、退転なく申す。あ

ところ

お

い

るざいとう

むかし

き

るいは所を追い出だされ、あるいは流罪等。昔は聞く、

ふきょうぼさつ じょうもくとう いま み にちれん とうけん あ
不輕菩薩の杖木等を。今は見る、日蓮が刀剣に当たること
を。

にほんこく うち むち じょうげばんにん い にちれんほつし いにしえ
日本國の有智・無智、上下万人の云わく「日蓮法師は、古
ろんじ にんし だいし せんとく 勝 にちれん
の論師・人師・大師・先徳にすぐるべからず」と。日蓮こ
ふしん 晴 しょうか ぶんえい おおじしん だいちょうせい
の不審をはらさんがために、正嘉・文永の大地震・大長星
み かんが い わ ちょう ふた だいなん
を見て勘えて云わく「我が朝に二つの大難あるべし。い
じかいほんぎやくなん たこくしんぴつなん
わゆる自界叛逆難・他国侵逼難なり。自界は鎌倉に權大夫殿
ごしそん 同士討 しゅつたい じかい かまくら ごんのだいぶどの
御子孫どしうち出来すべし。他国侵逼難は四方よりあるべ
し。その中に、西よりつよくせむべし。これひとえに、仏法
なか にし 強 ぜい ぶっぽう

いつこくこぞ

よこしま

ぼんてん

たいしゃく

たこく

おお

が一国挙つて邪なるゆえに、梵天・帝釈の他国に仰せつ

責

けてせめらるるなるべし。日蓮をだに用いぬほどならば、

まさかど すみとも さだとう としひと たむら しょうぐん ひやくせんまんにん

将門・純友・貞任・利仁・田村のようなる将軍、百千万人

かな

実

しんごん

ねんぶつとう

ありとも叶うべからず。これまことならずば、真言と念佛等

びやつけん

しん

もう

そうちら

の僻見をば信ずべし」と申しひろめ候いき。

きよすみさん

だいしゅ

にちれん

ふぼ

さんぽう

なかんずく清澄山の大衆は、日蓮を父母にも三宝にも

思

落

たま

こんじょう

にちれん

ふぼ

たま

たま

おもいおとさせ給わば、今生には貧窮の乞者とならせ給い、

ごしよう

むけんじごく

お

たも

びんぐ

ゆえ

たま

たま

後生には無間地獄に墮ちさせ給うべし。故いかんとなれば、

とうじょうのさえもんかげのぶ

あくにん

きよすみ

飼

鹿

とう

狩

取

東条左衛門景信が悪人として清澄のかいしし等をかりとり、

ぼうぼう ほつしどう ねんぶつしや しょじゅう にちれんかたき

房々の法師等を念佛者の所従にしなんとせしに、日蓮敵をなして領家のかとうどとなり、「清澄・二間の二箇の寺、東条が方につくならば、日蓮、法華経をすてん」とせいじようの起請をかいて、日蓮が御本尊の手にゆいつけていのりて、一年が内に両寺は東条が手をはなれ候いしなり。

この事は、虚空藏菩薩もいかでかすてさせ給うべき。大衆も、日蓮を心えずにおもわれん人々は、天にすてられたてまつらざるべしや。こう申せば、愚癡の者は、「我をのろう」

もう ごしょう むけんじごく お ふびん もう
と申すべし。後生に無間地獄に墮ちんが不便なれば申すなり。

りょうけ あま 御 前 によにん ぐち ひとびと 言 脅
領家の尼 ごぜんは女人なり。愚癡なれば、人々のいいおど
せば、さこそとましまし 候 らめ。されども恩をしらぬ人と
なりて、後生に悪道に墮ちさせ給わんことこそ不便に候え
ども、また一つには日蓮が父母等に恩をかぼらせたる人な
れば、いかにしても後生をたすけたてまつらんこそいの
り 候え。

ほけきょう もう おんきょう べつ そうら
法華經と申す御經は別のことも候わず。「我は過去

五百塵点劫より先の仏なり。また舍利弗等は未来に仏になるべし」と。「これを信ぜざらん者は無間地獄に墮つべし。我のみこう申すにはあらず。多宝仏も証明し、十方の諸仏も舌をいだしてこう候。地涌千界・文殊・觀音・梵天・帝釈・日月・四天・十羅刹、法華経の行者を守護し給わん」と説かれたり。されば、仏になる道は別のようなし。過去の事、未来の事を申しあてて候が、まことの法華経にては候なり。

にちれん

筑紫

み

蝦夷

いつきいきよう

日蓮は、いまだつくしを見ず、えぞしらず。一切経をも

かんが

そら

あ

おの

つて勘えて候え巴、すでに值いぬ。もししからば、「各々

ふちおん ひと
不知恩の人なれば、無間地獄に墮ち給うべし」と申し候は、

むけんじごく お たも
もう そらう
違 そうろう

たがい 候べきか。今はよし、後をさらんぜよ。日本国は

とうじ 壱岐 つしま
のち 御 覧 にほんこく
いま そら
とき そら
うら そら

当時のゆき・対馬のようになり候わんずるなり。その時、

あわのくに 蒙古 よ せ そら
とき とき
安房国にむこが寄せて責め候わん時、「日蓮房の申せし事

にちれんぼう もう
こと

の合うたり」と申すは、偏執の法師等が口すべくめて無間

むけん

地獄に墮ちんこと、不便なり、不便なり。

じょうがつじゅういちにち

正月十
一日

日蓮 花押

にちれん

かおう

安房国清澄寺大衆中

あわのくにせいちよじだいしゅちゅう

文 佐 渡 どの 助 阿 閣 梨 ご ぼ う こくぞう
みまえ みまえ だいしゅ 読 聞 たま 御 前 に し て、 大 衆 ご と に よ み き か せ 給 え。
虚空藏の